

niponica

Discovering
Japan

にほにか

no. 32



・特集・

木がつなぐ日本の文化



• 特集 •

木がつなぐ日本の文化

国土の7割を森林が占める日本は、木と暮らしが切っても切れない関係にある。
自然を尊び、その恵みを余すところなく活かしてきた先人の技や知恵は、
今も私たちの生活の中に息づく。

contents

- 04 至高の木造建築
- 06 時代を超えて受け継がれる
伝統建築工匠の技
- 10 木がつくる極上のくつろぎ
- 12 モダンと伝統が溶け合う木工品
- 14 木の香気を吟味する
- 16 にっぽん地図めぐり
物語のある木
- 18 召し上がれ、日本
松茸
- 20 街歩きにっぽん
松本
- 24 ニッポンみやげ
竹かご

江戸時代の絵師・酒井抱一（1761-1829）
が描いた桜の木（『桜楓図屏風』右隻）
表紙／高知県梼原町 "Yusuhara Wooden
Bridge Museum 梼原 木橋ミュージアム"
Photography by ©Takumi Ota

日本語で「日本」を表す時の音「にっぽん (nippon)」をもとに名づけられた「にほにか (niponica)」は、現代日本の社会、文化を広く世界に紹介するカルチャー・マガジンです。日本語版の他に、英語、スペイン語、フランス語、中国語、ロシア語、アラビア語の全7カ国語版で刊行されています。

no.32 R-040314

発行／日本国外務省
〒100-8919 東京都千代田区霞が関 2-2-1
<https://www.mofa.go.jp/>



至高の木造建築

ひゃくねん せんねん とき こ げんだい う つ にほん じんじゃぶっかく
 百年、千年の時を超えて、現代に受け継がれる日本の神社仏閣。
 しゅうふく さいけん く かえ おう じ かがや いま つた
 修復と再建を繰り返し、往時の輝きを今に伝える、
 もくどうけんちく すうこう び かん
 木造建築の崇高な美を感じてみたい。

平等院鳳凰堂

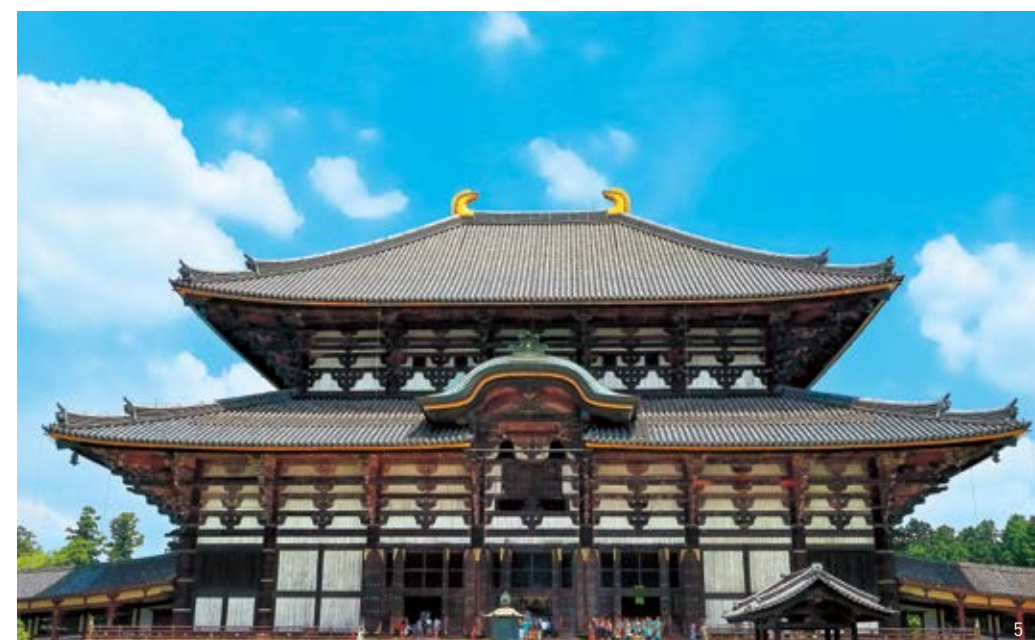
上／11世紀に建立された京都府の寺院。
 2012年～14年に行われた修復により、
 創建当時の鮮やかな色彩が再現された
 (写真提供＝平等院)

瑠璃光寺五重塔

右上／山口県の瑠璃光寺にある、15世紀
 に建立された高さ約31mの五重塔。大き
 く反った檜皮葺き（8頁参照）の屋根が、
 優美な佇まいを見せる（写真＝PIXTA）

東大寺大仏殿

右下／間口約57m、奥行約50m、高さ約
 47mと、伝統的な木造建築では世界最大級
 とされる奈良県東大寺の大仏殿。8世紀
 の創建当初は、間口約86mだったと伝わ
 る（写真＝PIXTA）





時代を超えて受け継がれる 伝統建築工匠の技

日本における木造建築の文化を支えているのは、伝統を継承する職人の手仕事。
ユネスコの無形文化遺産にも登録された、技術の粋をここに見る。

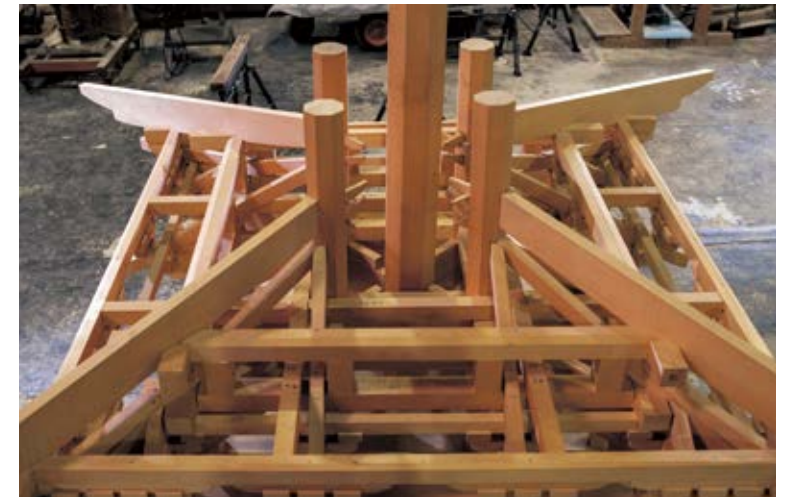
写真●川辺明伸



- 1/日本で最初の官寺として創建された四天王寺。20世紀初頭の再建にも、金剛組が携わっている(写真=PIXTA)
- 2/棟梁の木内さん(左)と金剛組会長の刀根さん。旗は番匠器(ばんしょうぎ)と呼ばれ、鉋(かんな)、のみ、のこぎりなどの大工道具の絵で表した「南無阿彌陀仏」(仏教における念仏)が記されている
- 3/鉋を使い、木材の表面を削る
- 4/のみを少しずつ入れ、曲面をつくりだす。加工はすべて手仕事で行われる
- 5/木内さんの大工道具。鉋やのみ、かなづちなど、用途に合わせて何種類もの道具を用意している



- 6/上: 模型を使い、継手について解説する木内さん
下: 片方の木材の先端を尖らせ、もう片方の木材は先端がびつたりとはまるように削られる
- 7/梁や柱が交わる部分を接合する仕口の工法。厳重に寸法を取った木材の面や角度を複雑に組み合わせることで、強度のある建築が生まれる



1400年の歴史を受け継ぐ大工の技

日本では、神社仏閣の建築や修復は、「宮大工」という専門の職人によってなされる。大阪市にある金剛組は、日本を代表する宮大工集団で、593年に建てられた四天王寺の造営に携わったのが起源とされることから、世界最古の企業としても知られている。

金剛組に所属する木内繁男さんは、50年以上のキャリアを持つ大ベテラン。棟梁として若い宮大工を束ねる立場だ。木内さんが鉋を扱うと、削った木くずは薄いリボンのようにするすると伸びていく。木材を紙よりもはるかに薄く削る技は、長年の修業の賜物である。

社寺建築で最も重要とされる技術のひとつが、釘や金物を使わず木と木を隙間なくつなぎ合わせる「木組」と呼ばれる伝統工法だ。金属の腐食による木材の破損が少なく、また木のつなぎ目が振動でかかる力を吸収・分散させるために、地震にも強い。

「木組のおもな技法に、材木をつなげて長い柱や梁をつ

くる『継手』や、梁や柱が直交する部分を組み合わせる『仕口』があります。木材の強度や建物の意匠によって、さまざまな方法を使い分ける必要があります。技の数は200を超えます」と、木内さんは語る。

宮大工は、木の特性を熟知しておくことはもちろん、木材を切り出す技術や、日本文化に関する知識にも通じていなければならない。そのため、一人前になるには10年以上の時間を要するという。

近年は、宮大工を志す若者が減り続けており、次世代の育成が大きな課題になっている。だが、「単に技術だけを教えればいいわけではないのです」と言うのは、金剛組会長の刀根健一さん。

「我々が手がけているのは、仏様、神様がいらっしゃるって、地域の人たちが大切にしていける建物。社寺建築に込められた人びとの思いを汲み取ることも、宮大工には求められるのです」



1／熊野本宮大社社殿の檜皮葺屋根（写真＝PIXTA）
2／高さ10m以上にもなる木に登り、外樹皮を採取する原皮師 3／専用の包丁で、檜皮の形を整える
4／水に浸した檜皮を並べていく 5／葺く部位によって重ね方を変えながら、緻密な屋根に仕上げていく
（2～5写真提供＝全国社寺等屋根工事技術保存会）

樹皮を重ねてつくる芸術的な屋根

日本の伝統建築には、陶製の瓦をはじめ、ススキやヨシの草、スギやサワラの板で葺くさまざまな工法の屋根が見られる。なかでも「檜皮葺」は、ヒノキの樹皮・檜皮を何枚も重ねて屋根をつくり上げる驚くべき工法で、世界に類を見ない。

材料は、100年近く成長したヒノキの立木から剥ぎ取った外樹皮。原皮師と呼ばれる職人が、木の根元部分からへらを差し込み、下から上へ引き剥がして採取する。内樹皮を傷つけないように剥がせば、外樹皮は10年ほ

どで再生し、再び採取できるようになる。

その後、長さ75cm、幅15cmほどに整えた檜皮を、職人の手で1枚1枚敷き詰めていく。1.2cmずつずらしながら上方向に重ね、5枚ほど積み重ねるごとに竹製の釘で固定。根気強い作業を繰り返し、やがて反り上がるような優美な曲線と重厚感のある屋根が生まれるのだ。

自然由来の材料を用いたサステナブルな工法として、今、改めて見直されている。

往時の姿を再現する彩色の技術

社寺建築の修復には、建築の構成物である彫刻や絵画の彩色も欠かせない。その目的は創建当時の姿を再現することにある。まず状態を分析してから技法を検討し、膠や漆、岩絵具（鉱物由来の絵具）など日本画にも使われる天然の顔料を用いながら、剥がれ落ちた色を補い、絵柄を復原していく。木材を保護する観点からも、彩色が修復に果たす役割は大きい。



6／華麗な彫刻で知られる西本願寺唐門。2018年6月より3年4カ月をかけ、約40年ぶりに修復が行われた（写真提供＝西本願寺）
7／門の彫刻を修復する職人。創建当時使われていた顔料を蛍光X線分析や史料調査などで特定して彩色する（写真提供＝川面美術研究所）

木組の技を活かした堅牢で美しい間仕切り

日本の伝統建築で、構造と同じくらい重要視されるのが、戸や窓をはじめとした「建具」である。日常的な開閉の頻度に耐えられる丈夫さと使いやすさを兼ね備える建具には、軽くて細い木材を使った繊細な木組の技術が欠かせない。組んだ後の割れや歪みを防ぐため、ヒノキやスギ、マツ、ケヤキなどのうち年輪の幅が小さく木目の通った良材だけを選び、高度な技術を持った職人の手によって修復された建具は、その後何百年と使い続けられるほどの堅牢さを保つ。



8／約800年前に建立された大報恩寺に取り付けられた部戸（しとみど。写真左手）と呼ばれる建具（写真＝アフロ）
9／木組をする建具職人の鈴木正さん。伝統建具の製作や修理に60年以上携わってきた第一人者で、近年は技術継承にも力を注ぐ（写真提供＝全国伝統建具技術保存会）
10／格子に板をはさんだ部戸の製作風景。格子の木組には、寸分の狂いも許されない（写真提供＝全国伝統建具技術保存会）



1



2



3



4

木がつくる極上のくつろぎ

2013年、日本初のクルーズトレインとしてデビューした「**ななつ星 in 九州**」。
匠の技を結集した豪華列車が九州の大地を駆け抜ける。

ロイヤルワインレッドに塗られた車体に、金色のエンブレムが輝く。高級ホテルを思わせるぜいたくな佇まいが魅力のななつ星は、日本の南西部に位置する九州各地の名所を一流のサービスとともにめぐる観光寝台列車だ。

大きな展望用の窓がある広々とした客室やバーカウンターが併設されたラウンジカーは洗練された雰囲気の中にぬくもりが感じられる。それはきっと、車内が木の素材にあふれているためだろう。

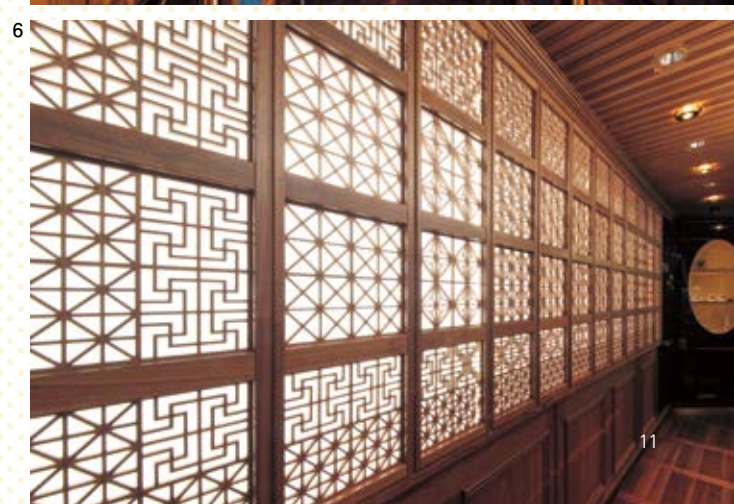
一見、すべてが木造に思える内装だが、実は強度や耐火性を確保するための工夫が施されている。木の建材できているようにしか見えない壁や天井には、薄さ0.2mmの天然木の板をアルミに貼り合わせたものが使われているという。アーチ状の格子天井や装飾的な壁もみな職人が手で貼り合わせた突板によるもので、木の風合いを表現するために驚くほどの労力がかけられているのだ。

さらにななつ星の空間を華やかに彩るのが、九州の福

- 1／緑豊かな九州を走る「ななつ星 in 九州」
- 2／黄金に輝くエンブレム
- 3／車内で組子の製作体験が行われることも
- 4／DXスイートの客室。大きな車窓から雄大な景色が楽しめる
- 5／昼は休憩場、夜はバーとして使われるラウンジカー
- 6／光を透かして浮かび上がる組子細工の壁

岡山県大川市に受け継がれる大川組子だ。組子とは、切れ込みや溝を入れた木片同士を組み合わせ、幾何学的な図柄を表現する木の工芸。数ミクロン単位で調整する職人技によって、繊細で頑丈な細工ができあがる。車内の壁や窓を飾る組子は、柔らかい光を透かして美しい模様を映し出し、見る者の心を和ませる。

木がつくる極上のくつろぎに身をまかせ、壮大な自然と美しい景観を巡る。そんな旅を一生に一度は体験してみたい。



6



モダンと伝統が 溶け合う木工品

でんとう けいしやう
伝統を継承しながら、
いま くらしにもすなりとなじむ。
し ぜん せいか そな
自然のあたたかみとデザイン性を兼ね備えた、
もっこうひん
モダンな木工品たち。

木のドレープから放たれる 柔らかな光

とうめい
透明なポリプロピレンにサクラ材を貼っ
いた わんきよく ふくごつ ぞうけい ひょうげん
た板を湾曲させ、複雑な造形を表現した
しょうめい きぐ しょうめい
照明器具。ドレープのすきまから放た
れた光は、天井や壁に花のような陰影を
うつし出す（写真提供＝照明作家・谷俊幸）



流線形の世界的名作チェア

りゅうせんけい せいかいてきめいさく
立体的に成形された同じ形の合板を左右に2枚合わせ、蝶のよ
うなフォルムを形づくった「バタフライスツール」。デザイナー
やなぎさうり ぜんしん ぞうけい せいかい ひょうが
ー・柳宗理による斬新でシンプルな造形は世界で評価され、ル
ーブル美術館などに収められている（写真提供＝天童木工）

木馬にもなる椅子

すわ りごちと あんぜんせい を かね ぶえた
子ども用の椅子。座面の高さは成
長に合わせて調節ができ、大人も
つかえる設計になっている。ひっく
り返すと木馬として遊ぶこともで
きる（写真提供＝株式会社 Sdl）



木から流れる 音楽を聴く

ぎ ふ ひ だたかやま う つ ぎ
岐阜・飛騨高山に受け継がれた木工の伝
統が、ヘッドフォンとして現代によみが
えった。硬く音の反響がよいカエデを
主として、耳あてには肌触りのよいヒノ
キが使われ、金具を用いない細工も見事
（写真提供＝ノクターレ）



古くて新しい 日本の弁当箱

ふる あたら
にほん べんとうばこ
ヒノキやスギの板を円形に曲げ、サクラ
やカバの樹皮で綴じ合わせる伝統工芸
「曲げわっぱ」の弁当箱。軽くて保湿力
が高く、食材も傷みにくい。木目を活か
したデザインとも相まって、時代を超え
て愛される（写真＝PIXTA）



驚きの製法でつくられたシックな木工品

おどろ せいほう
世界遺産に登録されたブナの原生林・白神山地を擁する青森が
生んだプロダクトブランド「BUNACO」。テープ状に加工し
たブナを巻き付けて成形し、皿などのうつわをはじめ多様な製
品を展開している（写真提供＝BUNACO）



木の香気を吟味する

日本には、茶をたしなむ茶道や、花を生ける華道とならび、香りを究める「香道」という遊芸の道があり、木が重要な役割を果たしている。

協力・写真提供●日本香堂・香十



上／香炉を一度手で覆い香りを聞く。美しい所作も作法のひとつ
(写真＝PIXTA)
左／香道では6種類の香木を組み合わせて使う
右／木そのものに芳香がある白檀。香木のほかに、仏像彫刻や工芸品にも用いられる

日本の香り文化は、香木という「木」と分かちがたく結びついて発展してきた。仏教とともに伝来したといわれる香木は、当初、仏前を清めるために使われ、8世紀頃からは香木の粉末と各種の香料を混ぜ合わせた練香を部屋や衣類に焚きしめることが貴族の間で行われた。その後、香木そのものを焚く風習が武士たちの間で流行。やがて16世紀になると、決まった作法で香を焚き、そ

の味わいを鑑賞する「香道」が確立した。香道で使われる香木は、沈香と白檀に大別される。白檀は甘やかな香りのビャクダン科の樹木で、仏具などにも使われる。いっぽう、沈香は、ジンチョウゲ科の樹木が傷ついたり、倒れたりした際に自ら分泌した樹脂が長年の間に凝固し芳香物質化したもので、熱で温めると芳香を出す。その香りは個体によって異なるが、最も高級なものは「伽



現存するもののうち、最も有名な伽羅のひとつ「蘭奢待」（らんじゃたい）。8世紀の天皇の宝物を収蔵する正倉院に伝わる。重さ11.6kg、全長156cm



羅」と呼ばれ、古来、非常に珍重されてきた。香道では、小さな陶製の香炉で香木を温め、香気を感じ取ることを「聞く」といい、香りの特質は「甘い」「酸っぱい」「苦い」と、味覚に照らすなどして表現される。数種の香木を焚いて、香りの違いや和歌の句との関連を言い当てたりする優雅な遊び「組香」も行われる。天候や湿度で微妙に変化する香りを言い当てることはと

- 1 香道で使われる香炉。炭を忍ばせた灰の上に雲母（うんも。鉱石）の薄片を置き、約2mm四方の香木を載せて温める
- 2 数種の香木を焚いて香りを聞き、香りの違いを言い当てる「組香」のようす
- 3 香りに心を集中させ、なにかを感じ取ろうとするひとときは瞑想にも通じる



にほん こう たの
日本の香の楽しみとは

西洋のアロマテラピーは「ローズ」「ラベンダー」「ペパーミント」など、かいだ瞬間にそれが何の香りかははっきりとわかるような、いわば具象の香りです。それに対し、香木の香気は抽象的で、自分の心の持ち方次第でいかようにも世界を描けます。嗅覚はほかの感覚にも作用し、五感が研ぎ澄まされるため、身体機能を高める効果もあります。
(お話をきいた人 香十・稲坂良弘さん)

ても難しいとされるが、大切なのは、勝ち負けではない。木の切片から立ちのぼる香気により想像を広げて季節の趣向や文学的テーマに思いをはせ、香りを味わいつくすことにこそ、その醍醐味がある。



にっぽん 地図めぐり

物語のある木

日本には、人格化されて賛美の対象となる木や、神として畏怖される古木や大樹が数多くある。なぜなら、木は魂を宿すと考えられているからだ。



福岡

太宰府天満宮の 飛梅

悲運の政治家・文人の菅原道真(845-903)が都から九州に左遷され、京都に残した梅を偲んで歌を詠むと、道真を追って木が飛んできたという逸話がある。道真を祀る太宰府天満宮本殿前では、春に満開の花を咲かせた「飛梅」に出会える(写真=PIXTA)

鳥取

小原神社(客神社)の森

田んぼの中にひっそり佇む森。スタジオジブリ制作のアニメ『となりのトトロ』に登場するような光景が見る者の想像力をかきたてる。その正体は、シイやモチノキなどの大木に囲まれた小さな神社。ウェブサイトに掲載されて人気を呼び、名所になった(写真=アフロ)



福島

三春滝桜

樹齢1000年以上のベニシダレザクラ。高さ13.5mの幹から咲く花が滝のように見えることから名が付いたという。近年、半径10km内に樹齢200年超の子孫樹が400本以上確認され、苗木が世界中に広まり、各地で花を咲かせている(写真=PIXTA)



栃木

貴婦人の木

「ラムサール条約」登録湿地の小田代ヶ原(おだしろがはら)には1本のシラカンバが立ち、その優雅な姿からいつしか貴婦人と呼ばれるようになった。季節で色を変える林が背景となって貴婦人を引き立て、訪れる人を飽きさせない(写真=アフロ)



東京

善養寺 影向の松

樹齢600年以上のクロマツ。高さは8mだが、地に這うように伸びた枝が、東西に約31m、南北に約28mと驚異的な広がりを見せ、影向(神仏が姿を現す)の名にふさわしい神々しさをたたえている(写真=PIXTA)



静岡

三保の松原

世界遺産「富士山」の文化遺産に登録された白砂青松の絶景スポット。漁師が三保の松原にかかった天女の羽衣を見つけ、返す代わりに舞を所望したという伝説がよく知られ、能の曲目にもなった(写真=フォトライブラリー)



岐阜

神宮備林

三重県に鎮座する日本最高格の神社・伊勢神宮。その社殿を20年ごとに建て替える「式年遷宮(しきねんせんぐう)」に使用するヒノキの天然林が、岐阜の山中にある。人の手を極力入れず、時間をかけて成長させるため、丈夫で美しく育つ(写真=東濃森林管理署)



鹿児島

屋久島 縄文杉

推定樹齢2000〜4000年、幹回り16.4m、根回り43m。屋久島に自生する「屋久杉」の中でもひととき大きく、最古老の風格を放つ。ずんぐりした樹形は、島を頻繁に襲う台風に耐えるためと考えられる。1993年に世界自然遺産に登録された(写真=高比良有城)

和歌山

熊野古道 大門坂の大楠

世界遺産にも登録された熊野古道は、はるか昔から無数の参拝者が行き来した巡礼の道。山間の中辺路は木々が生い茂り、とりわけ神聖な空気に包まれるが、その入り口・大門坂には、樹齢800年という楠の巨木が立ち、旅人を迎え入れる(写真=PIXTA)



召し上げれ、
日本

21

松茸

香り高い
森からの贈り物

写真 ● 新居明子



焼き松茸

松茸のおいしさをそのまま味わいたいなら、丸ごと焼くのが一番だ。新鮮な松茸の中にはまだたっぷりと水分が蓄えられており、噛んだ瞬間、香り高くジューシーな味わいが口中に広がる



松茸は、マツ科の樹木の根元に生えるきのこで、日本ではおもにアカマツ林に生える。日本の食卓を賑わすきのこは数多いが、日本人にとって「特別なきのこ」といえば、松茸をおいてほかにない。

その最大の魅力は、マツタケオールという成分による独特の甘い芳香。食において香りを大切にする日本人はみな、秋の旬の出盛りに一度は口にしたいと願う。鮮度が落ちやすく人工栽培もできないため非常に高価であるのも、松茸が憧れの食材となっているゆえんだ。

松茸が古くから珍重されてきたことは、8世紀の歴史書に天皇への献上品としての記述があることからわかる。江戸時代（1603～1868）には税としても納められた。たとえ松茸が育つ土地の所有者であ

っても、松茸だけは勝手に売買できないようにするなど、村が生産を厳しく管理したという。

現代の森林の環境変化は、松茸の収穫にもいやおうなく影響を与えている。松茸の宿主であるアカマツは、古来、薪や炭などの燃料に使われてきた。そのためアカマツの森には定期的に人が入って手入れがされ、日当たりと風通しがよい場所を好む松茸に適した環境が整えられていた。それが1970年代以降、燃料が石油に代わって山の手入れがなされなくなり、松茸生産量が減少する一因となった。

和食では、松茸の香りと風味を殺さぬよう、そのまま焼くか、米と炊き込むといったシンプルな調理で味わう。東京・赤坂の松茸専門店「赤

坂松葉屋」の代表取締役・宮南 譲さんも、とにかく鮮度を保つことが肝心、と言い切る。「時間がたてばたつほど香りとみずみずしさが失われてしまいますが、今は輸送手段が発達し、新鮮なまま届くので助かっています」

かつて松茸を市場に卸す仕事をしていた宮南さんは、「一日、松茸の中で仕事をしていると、身体じゅうに香りがついたものです」と笑う。それほどまでに強い香りが松茸の魅力である。

国土の3分の2を占める森からの恵み。その最高峰は、昔も今も松茸である。そしてその稀少さゆえに、松茸は深く日本人に愛されてきたのだともいえる。



土瓶蒸し

専用の小さな土瓶に松茸やエビなどの具材とだし汁を入れ、蒸してつくる「土瓶蒸し」。うま味と香りが抽出されただし汁を飲みながら、具材を食す。仕上げにスタチなどの柑橘系果実を絞ると、うま味がもっと引き立つ

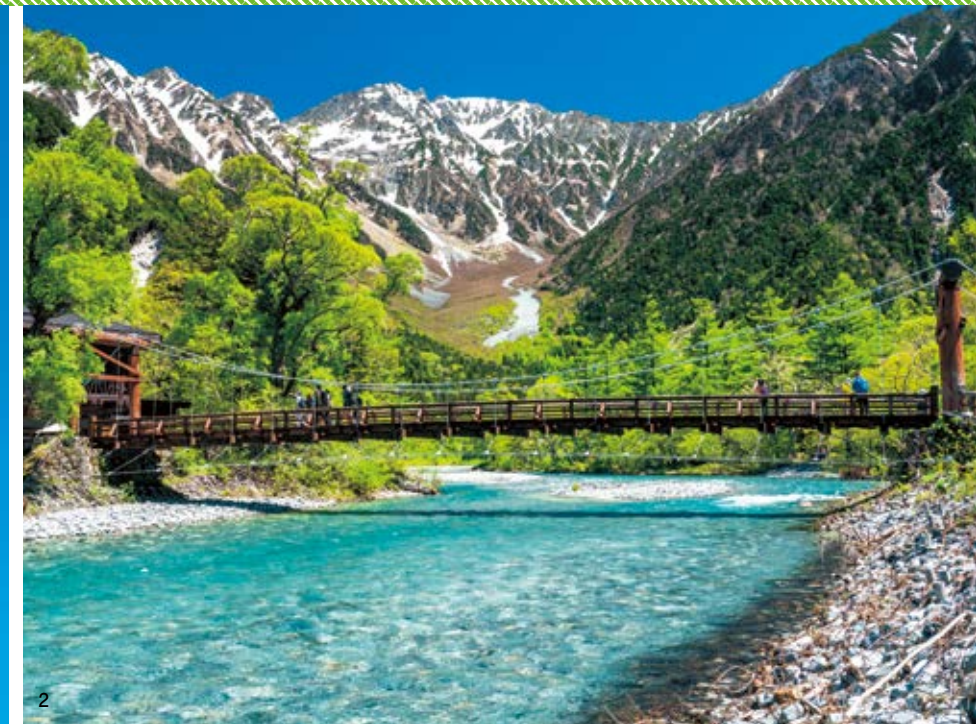


上／傘がまったく開いていない状態の松茸が、香りがよいとされ、好まれる
下／上質の松茸を仕入れ、提供している松茸と飛騨牛の専門料亭「赤坂松葉屋」

松茸ごはん

松茸と米をだし汁と醤油でシンプルに炊きあげる。松茸はあまり細かくせず、形がわかる程度の大きさに刻む。新米と松茸という組み合わせが楽しめるのは秋ならではの





きた 北アルプスのふもとに ひろがる 工芸の街 まち

まつもと 松本

やまやま かこ ふう ど い
山々に囲まれた風土を活かし、
こうげい ぶん か はぐく まつもと まち
工芸の文化を育んできた松本の街には、
す くう き なか お じ かん なが
澄んだ空気の中に落ちついた時間が流れている。

写真●逢坂 聡、アフロ、PIXTA



- 1/ 高さ約30mの大天守を持つ「松本城」。晴れ渡った日には北アルプスの山並みを背景に美しい景観を見せる
- 2/ 日本屈指の山岳リゾート「上高地」は市中心部からバスで60分程度の距離。環境保護のため、車の往来は制限されている
- 3/ 19世紀後半に小学校として開校した「旧開智学校」。1876年建造の校舎は、1963年まで使用されていた(写真提供=松本市教育委員会 耐震工事のため2024年秋頃まで休館)
- 4/ 草間彌生の作品が出迎えてくれる「松本市美術館」(写真提供=松本市美術館)



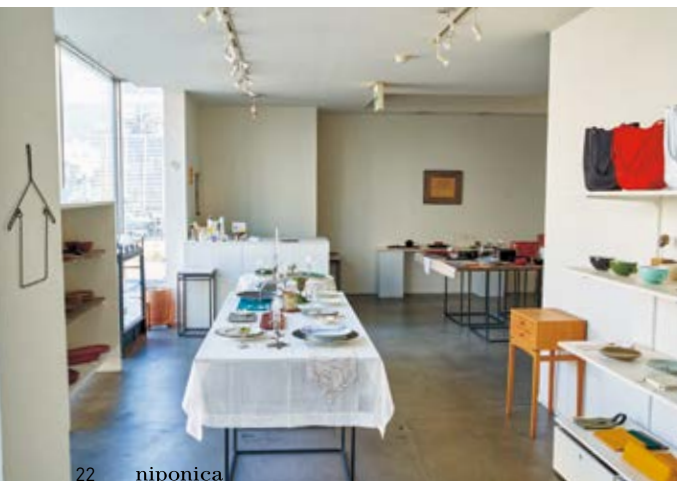
5



6



7



8

5/松本民芸家具を多数展示・販売する「松本民芸家具中央民芸ショールーム」。イギリスのデザインにならって発展させた椅子は、松本民芸家具の象徴ともいえる存在
6/家具づくりはすべて手仕事で、用いる道具の製作まで職人が手がける

東京の中心地から約2時間半。特急列車の車窓に北アルプスの美しい山並みが見えてきたら、目的地はもうすぐだ。日本列島の中央部に位置する長野県松本。四方を山々に囲まれ、山岳景勝地として名高い上高地を市域に含む。中心部には川が流れ、山々の伏流水による湧水も豊富で、街のあちこちに井戸が見られる。これら自然豊かな環境が、街を包む清冽な空気を生み出している。交通の便を活かして商業が発達し、古くから栄えた松本の象徴が、16世紀末に築城された国宝「松本城」だ。現存する五層の天守の中では日本最古で、周辺を囲むお濠とともに四季折々の美しい景観を楽しめる。その北側には、19世紀後半に建てられた「旧開智学校校舎」がある。地元の大工が手がけた和洋折衷の建築は日本の近

7/1985年から始まった「クラフトフェアまつもと」。木工品だけでなく、陶器やガラス細工、染織物なども集まり、多くの人で賑わう(写真提供=松本クラフト推進協会)
8/「ギャルリ灰月」には、地元や全国から集められた雑貨が豊富に揃う。桐材を用いた漆器の酒器は軽量で気軽に日常使いができる、同店の定番品(右)。地元の作家が手がけるバッグは手触りがよく、染色も美しい人気アイテム(左)



9



10



11

9/「小昼堂」は、伝統食「おやき」に現代風のアレンジを加える人気店。名物の野沢菜漬をはじめ、チーズやリンゴなど多彩なあんが楽しめる
10/1884年創業の老舗菓子店「開運堂」。看板商品の真味糖は砂糖、蜂蜜、クルミをかためた和風ヌガー
11/松本民芸家具の創始者が設計に携わった喫茶店「珈琲まるも」。オリジナルのブレンドコーヒーとともに、手づくりのプリンもファンが多い

代化の足跡を残す貴重な史跡だ。
良質な木材に恵まれる松本では、江戸時代(1603～1868)から家具づくりが盛んだった。その後、産業は一時衰退したが、実用的な生活工芸品を守り伝えようとする民芸運動の影響を受け、1940年代に復興。和家具の質実剛健なつくりと洋家具の曲線を基調としたシルエットをひとつにした「松本民芸家具」が生まれた。材となるミズメザクラに丹念にニスや漆を塗り重ねて表現される赤茶色の鈍い輝きは、今も多くの人に愛されている。近年ではアートとクラフトの街としても注目を集める。地元出身の前衛芸術家・草間彌生の作品が常設展示される「松本市美術館」はその代表だ。また、毎年5月に開催される、やきものや木工の作家と愛好家が日本全国

から集うマーケット「クラフトフェアまつもと」は、今や新緑の季節に欠かせない風物詩となっている。市内には目利きのオーナーが営むギャラリーや洗練された雑貨の店も多いので、お気に入りを探してみよう。
お腹が空いたら、野菜や果物のあんを小麦粉の生地で包んで焼いた伝統食「おやき」がおすすめ。老舗菓子店に立ち寄って、お土産を選ぶのも楽しい時間だ。歩き疲れたら、松本民芸家具のテーブルや椅子が懐かしい雰囲気をかもし出す「珈琲まるも」で、ゆっくりとした時間を過ごしたい。
城下町の佇まいを残しながら、決して古さを感じさせない。豊かな自然と新旧の工芸文化が混ざり合う松本の魅力を、ぜひ訪れて体験してほしい。



松本エリア地図
●松本城
●旧開智学校
●松本市美術館
●松本民芸家具中央民芸ショールーム
●ギャルリ灰月
●小昼堂
●開運堂
●珈琲まるも
●交通案内
新宿駅から松本駅までは、JR中央線の特急で約2時間30分。
●問い合わせ
松本市の観光情報サイト「新まつもと物語」
<https://visitmatsumoto.com/>



ニッポン



みやげ — 23

く 暮らしを彩る いるど じつよう ひ 実用之美

た け 竹かご

写真 ● 松下二郎

竹は成長が早く、寒さに耐えて緑を保つことから松や梅と並んで縁起物とされ、古来、絵画や工芸品のモチーフに描かれた。いっぽう、割いた竹「ひご」を編んでつくる竹かごは、さまざまな道具となって畑や台所で活躍し、働く日本人のよき助け手となってきた。

現代では、実用目的だけでなく、手づくりのあたたかみやデザイン性が見直され、インテリア雑貨として取り入れる人が増えている。シーンや機能、か

たちに応じた使い分けは、アイデア次第。かごを並べて「見せる」収納を演出したり、持ち手をオブジェに見立てて飾ったり。食器をセットして、お盆のように使ってもいい。涼やかな竹かごバッグで夏の街を歩けば、注目度も満点だ。

編み目の模様が多彩で精巧なもの、日本の竹かごの魅力。各地の専門店や雑貨店でお気に入りを見つけたら、使い込んで楽しみたい。

左上／青い竹かごに光が通り、見るからに涼しげ 左下／手付きかごに醤油などをセットして食卓へ 右上／そのまま美しいオブジェ風のかごに、布巾を置く 右下／ななめに交差させて編んだ網代編み(左)と透かし編みのバッグ

niponica

にほにか no.32

〈日本語版〉

発行／日本国外務省

〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1

<https://www.mofa.go.jp/> (外務省ホームページ) <https://web-japan.org/> (日本紹介ウェブサイト)